



第37回日本診療放射線技師学術大会
第23回アジアオーストラレーシア地域診療放射線技師学術大会 (23rd AACRT)
第28回東アジア学術交流大会 (28th EACRT)

第8回

東京への道 Go To TOKYO

城北支部(第6地区) 伊佐 理嘉

(公益社団法人東京都診療放射線技師会)



「古くからの東京の繁華街」

『東京への道』で東京の紹介をしてほしいとの依頼があり頭を悩ませていたが、今回は東京の繁華街を紹介したいと思う。東京の繁華街といえば渋谷や新宿などたくさんあるが、古くからの街道沿いの繁華街として、筆者の地元である足立区北千住周辺を紹介したいと思う。以後は北千住周辺ということで「千住」と表記させていただく。

江戸時代、日本橋を起点に東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道が幹線道として整備され、街道沿いの宿場町は人々の集まる場所として栄えてきた。千住はもともと荒川(隅田川)と綾瀬川が付近で交差していたため、水上交通の中継地であったが、江戸時代に入り千住大橋が架橋されると、日光・東北方面からの玄関口として急速に発展していった。

現在でも千住には東京都の中央卸売市場があり、水上交通の要所だったことをうかがい知ることができる。また東武スカイツリーライン北千住駅は、駅周辺とは別に旧街道沿いにさまざまな商店が並び、賑わいを見せている。最近では再開発により周辺に大学のキャンパスもできつつあり、学生の街としての側面も持ち始め、住宅情報サイトなどでは関東の住みたい街ランキングの30位以内に入るなど人気の街となっている。

千住は宿場町としての賑わいの一方、町外れには小塚原刑場があり、『解体新書』の翻訳者である杉田玄白・中川淳庵・前野良沢らが刑死者の腑分け(解剖)に立ち会い、解剖図の正確性を確かめたといわれる。刑死者の供養のために創建された南千住回向院には、西洋医学の足跡として観臓記念碑がある。

そして外せないのが松尾芭蕉だろう。『奥の細道』の著者である松尾芭蕉は千住より旅を始めたといわれる。それを記念して松尾芭蕉像が設置されている。しかし、2体の芭蕉像があり、1体は千住大橋北側の足立区北千住に、もう1体は南側の荒川区南千住にある。『奥の細道』には、芭蕉は住まいの深川から船で隅田川を北上し、千住大橋で下船したと記されているが、千住大橋の北側か南側かは記載されていない。そこで2体の像となるのである。地元ではささやかな論争になっているようだが、松尾芭蕉の生誕イベントなどでは仲良く両区で行っているようである。江戸時代には近くにある西新井大師辺りが千住宿からの行楽地であったようだが、現在は東武スカイツリーラインで行く東京スカイツリーになるのであろう。千住の近くには診療放射線技師養成学校が2校あるので、懐かしいと言う方も少なくないのではないかなと思う。

今回は日光街道沿いの千住を紹介させていただいたが、昔から江戸につながる街道には人々が集い、さまざまな物が交換され、全国に拡散されていったことであろう。今秋には日本診療放射線技師学術大会が東京ビッグサイトで行われる。たくさんの知見が会場だけではなく、Webなども駆使して集い拡散していくことだろう。それを体験し、世の中の笑顔につながることを楽しみにしている。

最後になるが、正しい千住の楽しみ方はうまいものを食べ、うまい酒を飲み、大いに語り合うのが昔からの作法なのではないかと感じた。今秋にはそのような日常が少しでも戻っていることを切に願う。



観臓記念碑



南千住の芭蕉像(左)と北千住の芭蕉像(右)